

地域に根付く生涯スポーツプログラム

—— 総合型地域スポーツクラブ育成をめざして ——

The sports of life stage program for a community

曾 和 光 代 ・ 但 尾 哲 哉

I はじめに

生涯にわたり心身の健康を保持増進していくためには、健康や体力に関する正しい知識・理解をもつと共に、健康にとって必要なことを習慣付けることが大切である。

21世紀に向けて、科学技術の発展や生活の利便化によって、日常生活における身体活動がますます減少していくことを考えると、個人が主体的にスポーツに取り組むことが極めて重要になる。このため一人一人が日常生活の中にスポーツを豊かに取り入れることのできる生涯スポーツ社会を実現していくことが重要である。とりわけ、生涯にわたり主体的にスポーツに親しんでいくためには、幼少期に健康や体力を保持増進していくための基礎的な能力や態度を培い、健康的な生活習慣やスポーツ習慣を身に付け、その後の各ライフステージにおいて、これを基礎として、各人の興味・関心に基づき継続してスポーツに親しんでいくことが、ますます重要になる。文部科学省や日本体育協会は「みんなのスポーツ」をテーマに年齢にかかわらず、一生涯を通じてスポーツに親しむ生活習慣をもつことを勧めている。

さて、神戸親和女子大学（以下、本学という）では、すでに「生涯スポーツ」に関するプログラムは実施している。体育実技である運動遊びやレクリエーションを通して地域開放講座に取り組んできた。「レクリエーションを通して地域づくりを始める」（『福祉臨床

学科紀要』第2号、2005年、35～43頁）においては、リタイヤした高齢者の方々の余暇を如何に楽しむか、それを支援していく若者の養成等、地域に根付く大学が担う役割を少し示した。地域に根付いた「親と子の運動遊び」の他に、本年度より高齢者向けのスポーツ講座を開放した。サポートには、本学学生福祉臨床学科4回生に当たってもらい、学生にとっての講座は「生涯スポーツ実技演習」である。高齢者の方々と共にスポーツ種目を楽しみながら、如何にサポートしていくかを学びとっていく。地域へ開放した高齢者の方々への講座名は「ワクワクスポーツ」として本学の施設・用具を活用し、学生と共に心ワクワクとレクリエーションスポーツを通して、身体を動かして楽しんでいただき、それが健康保持につながり、引きこもり現象も軽くなって、地域コミュニケーションにつながってくれればと考える。余暇の一部を本学で楽しんでいただくのも一つの方法である。

さて、こうした地域開放講座は、一個人でなしとげられるものではなく、次世代へつなげていく事により、末永い地域へ根付いた講座でなければと考える。本学においても曾和が退職しても、地域との交流はあるべきで、次の世代へつなげるためにも共同研究していきたい。

社会の動きにより、地域のニーズは変わっていくものなので、形は変わっても地域との交流は捨てがたいものである。「総合型地域スポーツクラブ」形式をとり、その情報発信・

提供のネットワークを本学が担い、この地域において各スポーツ種目を通して、地域交流が図れば希薄な人間関係であるといわれる現代社会の課題解決の糸口にでもなればと考える。「総合型地域スポーツクラブ」については、共同研究している但尾に引き継いでいく。

(以上、曾和)

「総合型スポーツクラブ」の経緯

昭和36年6月6日スポーツ振興法が法律第141号として制定された。その内容は以下のよう

第一章 総則

(目的)

第一条 この法律は、スポーツ振興に関する施策の基本を明らかにし、もって国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与することを目的とする。

2 この法律の運用に当たっては、スポーツをすることを国民に強制し、又は、スポーツを前項の目的以外の目的のために利用することがあってはならない。

これを受け

第四条 文部科学大臣は、スポーツの振興に関する基本的計画を定めるものとする。

3 都道府県及び市（特別区を含む。以下同じ。）町村の教育委員会は、第一項の基本的計画を参酌して、その地方の実情に即したスポーツの振興に関する計画を定めるものとする。

さらに、文部科学省はスポーツ振興法に基づき、平成12年9月に文部科学大臣が「スポーツ振興基本計画」を策定した（平成13年度～22年度の10年計画で）。

その内容は、「地域におけるスポーツ環境の整備充実策で、生涯スポーツ社会の実現のため、早期に成人の週1回以上のスポーツ実施率が50%となることを目指す」というものである。政策を実現するための施策として「総合型スポーツクラブの全国展開」を10年間で、

各都道府県において少なくとも一つは広域スポーツセンターを育成、将来的には広域市町村単位に設置したいとしている。

兵庫県内では、平成18年春に県内827の小学校区へ「総合型スポーツクラブ」の設置が終了した。兵庫県は全国でもトップレベルのクラブ数を誇る県となった。しかし、実情は自主運営に多くの課題を残している。最大の課題は、財政問題で多くのクラブが県の補助金に頼っているのが現状である。

ここで注目したいのは、第四条3の文中「その地方の実情に即したスポーツ振興に関する計画を定めるものとする」の一文である。この文言が示唆するところは、多様な可能性を求めている。例えば、本学の所在する神戸市北区であれば、その実情として本学が拠点となり、それぞれの校区・地区での活動をサポートしたり、また本学が独自で地域の人々にプログラムを提供したりしていくことも含まれた発想であると理解できる。

本学は多くの学生を抱えており、このマンパワーが運営の柱となり、大学が低料金で施設の開放を行うイメージがある。学生にとってクラブの運営に携わり、スポーツの指導にあたるのが学習である。即ち、参加者は施設と指導者を求めており、大学は学習の機会を求めている。ギブエンドテイクが成立するシステムであろう。本学でも試行錯誤しながらも様々な活動を行っている。

(以上、但尾)

II 研究方法・目的

目的

- ・本学が開講している講座の意義確認と、受講者の希望確認

- ・本学が担うべき役割と方向性について

対象

① 高齢者プログラム「ワクワクスポーツ」の受講者1934年～1947年生まれの女性14名

② 幼児プログラム「親と子の運動遊び」35組3～4才児をもっている親子。回答は、母親。

方 法

・調査質問紙法

実施期間

・10月27日～11月7日 講座実施日

調査内容

後に添付

この調査内容・データー処理に関しては、児童教育学科「生涯体育・スポーツ」コースを受講している但尾ゼミ4回生の松本里菜さん・萬谷美佳さん・岩崎順子さんと杉知美さんの協力を得た。

Ⅲ 結果の考察

地域に向けて開放している講座

① 「ワクワクスポーツ」

対 象

60才～70才前後の方

期 間

秋学期9月末～毎週金曜日3限目(12:50～14:20)

場 所

本学体育館およびグラウンド等

内 容

体ほぐし ストレッチ、リズム体操、フォークダンス、ニュースポーツ種目
ソフトバレー、インデァカ、キンボール
ドッジボール等

実際にこの講座を受講したのは男女関係なく募集したが、女子大学なので、男性は敬遠されたのか、女性14名という結果であった。

調査の結果は、以下の通りである。

[問1] 「どこで、このプログラムを知りましたか。」

100%新聞折り込みチラシにより、この講座を知った方がすべてであった。本学と同区の神戸市北区の方が11名。神戸電鉄沿線の三田

市1名。三木市1名。兵庫区1名。と、本学からはそう遠くない方が多い。しかし、三田市・三木市・兵庫区は、少し本学へは時間がかかる。休まれる日が続き調査当日も欠席。北区の受講生11名で行った。北区の方は、近くでまさしく地域の方なので、毎回楽しみに参加して下さっている。

[問2] 「なぜ、このプログラムに参加しようと思いましたか。」については、図-1の通りである。

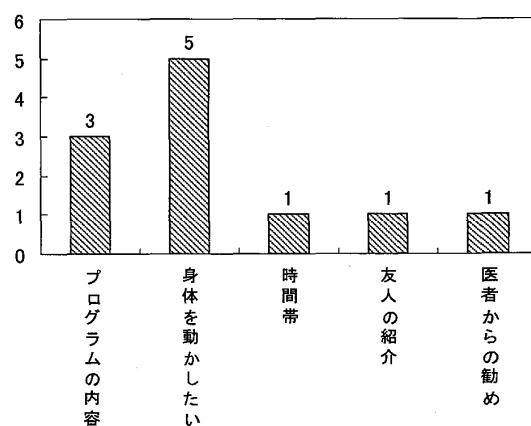


図1 プログラムの参加動機

身体を動かしたい。という答えが一番多い。次にプログラム内容となっている。

1) 具体的な回答例としてプログラム内容では、

- ・年代にあったスポーツをすることができる。
 - ・沢山のプログラム内容
- 2) 身体を動かしたいという内容では、
- ・運動することに興味があった
 - ・何か変わったことが、したかった。

この2点が、一番こちらが意図することである。楽しいプログラムで身体を動かしていただき、それが健康につながり、人との交流の場へとになっていくことを目標としている。

[問3] 「このプログラムに参加してみて、どうですか。」については、「楽しい」と、多くの人が回答。

具体的な回答例

- ・私でもできそう
- ・先生・生徒も一緒に活動できるところがよい
- ・若い方々と接して心が和む
- ・運動後は気分も爽やかになり、身体が軽くなったようだ。
- ・次回が待ち遠しい気持ち

と、プログラム企画側としては、うれしい回答である。

〔問4〕 今までしてきた種目について、おききます。

① どの種目が楽しかったですか。に、ついては、「インディアカ」であった。この種目については、意外な回答である。皆さん初めての体験で、最初、手のひらだけで打つのは難しそうであったが、慣れてくると、このスポーツの楽しさをがわかってきたようだ。ボールのように遠くへ飛んでゆかないのでボール拾いも少なく、手のひらをラケット代わりに楽しめるので手軽である。

② 難しい種目はありましたか。に、ついては、図-2の通りである。種目そのものが理解できず、難しいということではなく視力や体力がついてゆかず、プレーが続かない等を感じて、難しいという結果の回答であった。

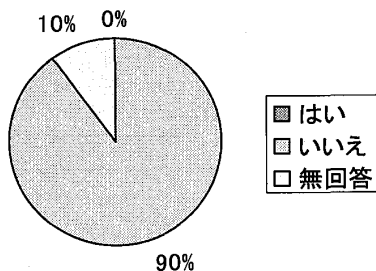


図2 難しい種目はありましたか。

〔問5〕 プログラムに参加する前と、参加しからの状態についておききます。

① 「体力の違いは、ありましたか。」に、ついては、図-3-①の通りである。

「はい」と、答えられた方の具体的な回答

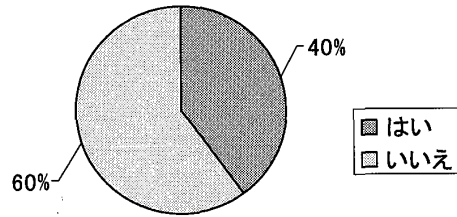


図3-① 体力の違い

としては、

- ・理解力・体力が思ったほどついていないのを実感した。
- ・片足で立つ測定の際、もっと長時間立つことができると思っていた。
- ・思ったより体力が残っていることに気づいた。

等の回答があり、思ったほど体力がなかった人や、体力がある人と感じた人それぞれであるが、自分の体力はこの程度であると再認識していただいた。

②「自分の中に何か変化はありますか。」に、ついては、図-3-②の通りである。

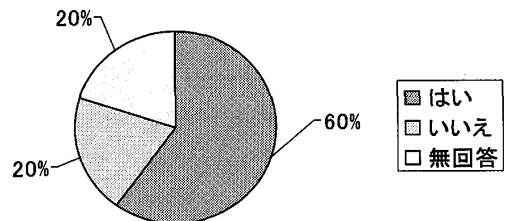


図3-② 自分の中の変化

「いいえ」と「無回答」の方を合わせると40%あり、本年度より始めて1ヶ月しかたっておらず、まだ成果が出るほど活動していないのが示されている。この質問は少し早すぎるように思えた。しかし、60%の方が、変化があったと答えている。

- ・汗をかくと気分がスッキリする。
- ・生活に張り合いが出てきた。
- ・気分的に若返る。
- ・運動後の気分の爽やかさ

・日常生活の中でも、もっと歩く機会を増していかななくてはならない様に思った。

等、活動の効果を示してくださっている。これを継続していけるようプログラムを提供していきたい。

このように身体を動かす活動のプログラムでは、なかなか持続することが難しく、運動を生涯にわたって生活の中に取り入れて継続することは、容易いことではなく半数の方が、6ヶ月以内に脱落してしまいやすい。現に、この講座も三木・三田と本学から遠くなると、日々の中で来るのに時間がかかり、少し何かがあると休みがちになり、日常生活の中に定着しにくい現実がある。

〔問6〕他にこのようなプログラムに参加されていますか。または、過去に参加されたことがありますか。については、**図4**の通りである。

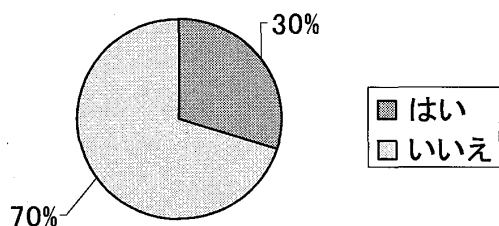


図4 他にこのようなプログラムに参加されていますか。また過去に参加されたことがありますか。

「はい」と答えていただいた人の

①「どのようなプログラムですか」については、1、ストレッチ。2、健康体操サークルでした。

②「現在も参加されていますか」については、「いいえ」が100%である。なかなか継続することの難しさがでている。

今回の活動は、持続していける声かけの大切さがうかがえる。

〔問7〕他に一緒に参加されている人とコミュニケーションを図ることができましたか。については、前述したように活動を始め

て日数がたっていないので、①「まあまあでした」が、トップで60% ②「できた」20%、③「たくさんできた」10%、④「しなかった」10%と、いう結果であったが、これも少し不適切な質問であったように思われる。そうプログラム参加者と特別に仲良くなれる程の回数と活動に達していないことが、理由である。

〔問8〕若い世代の学生と一緒に活動してみ、どうでしたか。について、

①皆さん気持ちのいい学生さんばかりで楽しい。

②活気があり、楽しい。

③やさしく接してくれて、うれしい。

④元気をいただいている。

⑤明るい雰囲気の中で、若さをいただいている。

⑥自分の年齢を忘れて、楽しく活動することができる。

以上である。世代を超えた交流は、高齢者の人々に活気を与え、お互いを理解するうえにも大切な要因である。

〔問9〕このプログラムに希望すること（例 種目・時間）などがあれば、お書きください。については、

①2時間にしてほしい。〔現在90分のプログラム〕

②ダンスもしてみたい

③色々な種目を体験させてほしい

この件について、募集にあたっては、予想をたて、プログラムを組んだが、実際に受講者が定着し始めてくると、それぞれの希望も取り入れて、楽しさ継続できるプログラムにしていきたいと考える。

〔問10〕他に意見があれば、お書きください。については、“講座の継続をぜひしてもらい、老後を楽しませてください。”という回答が得られた。

生活の中に、この活動を継続して根付くためにも、このプログラムの継続が第一であることは、うれしいことである。

次に、20年余り継続している「親と子の運動あそび」に関しての調査について述べる。

このプログラムに関しては、本学の紀要に実践報告しているが、さらに次へ引き継ぐにあたって、再度プログラムについて受講者の方々の把握をしたいと考え実施。順を追って述べていくと、

〔問1〕どこでこの活動を知りましたか。図-5の通りである。

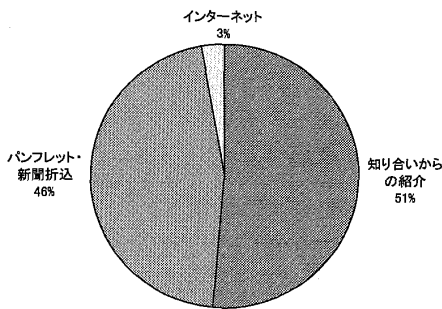


図5 どこでこの活動を知りましたか。

このプログラムに関しては、長年継続しているため、近所の方々の口コミで活動のことを知っていただいている強みがある。半数の方が知り合いからの紹介である。毎回、募集人数を超え抽選しているのが現状である。これこそ、地域に根付いたプログラムといえる。これもありがたいことである。

〔問2〕なぜ、この活動に参加しようと思われましたか。については、図-6の通りである。

一番に「子どもの活動の場を広げるため」、次に「運動させたい。楽しくあそばせたい。」が多く、母親が子どもを思いっきり遊べる場をのぞんでいるのがわかる。また、それに答えるべきであろうと考えてやってきたプログラムである。

〔問3〕参加してみて、どうですか。については、図-7の通りである。

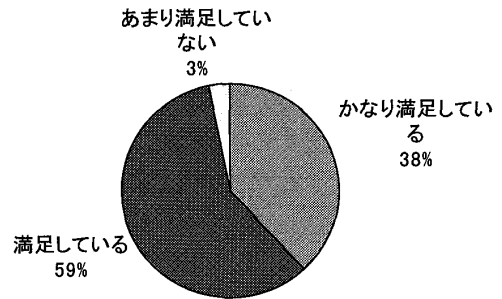


図7 参加してみてどうですか

「かなり満足している」も入れると、97%の受講者の方々に満足していただいていることになる。これもありがたいことである。

〔問4〕親子関係に変化はありましたか。については、図-8-①の通りである。

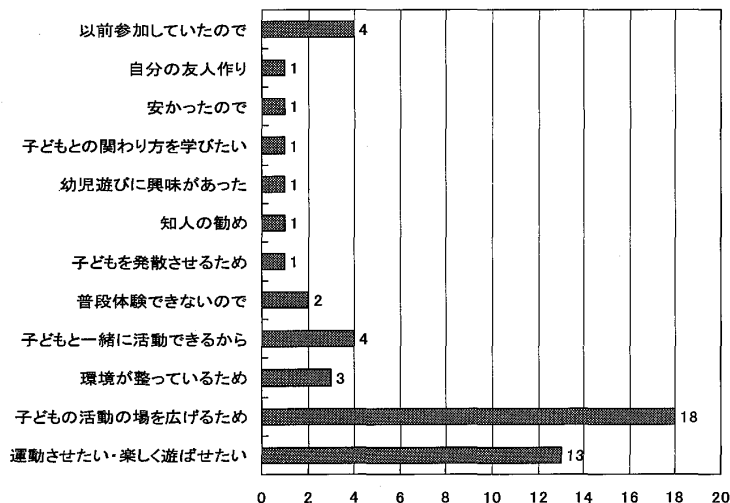


図6 なぜ、この活動に参加しようと思われましたか。(複数回答)

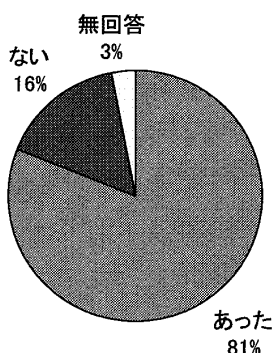


図8-① 親子関係に変化はありましたか

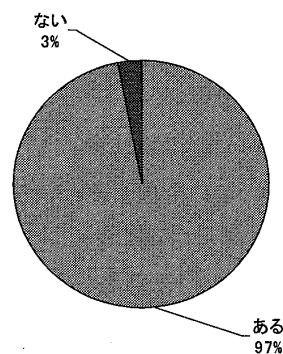


図9-① 活動を通してお子様が変わったと思う点がありますか

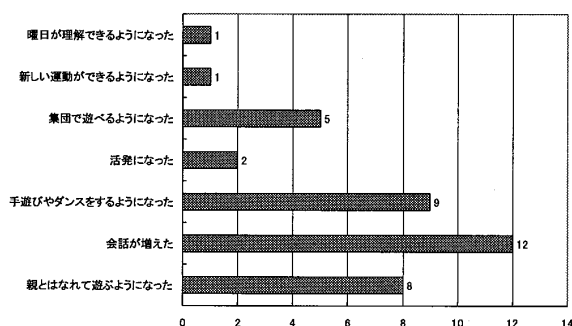


図8-② どのような変化ですか(複数回答)

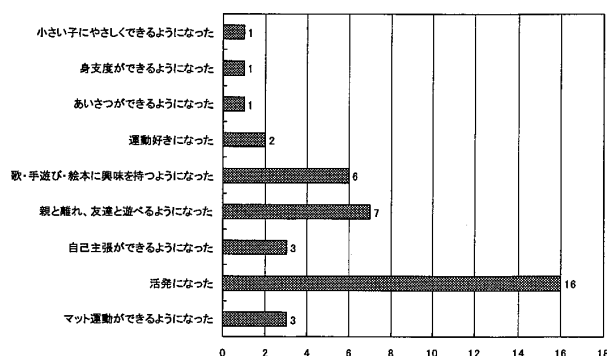


図9-② どのような点ですか(複数回答)

「あった」が81%と、なんらかの形でプログラム参加前と異なっていることになる。その変化は、どのようなものかは、図8-②の通りである。

母と子の会話が増えた。これがトップにきているのは、うれしいことである。母子関係のベースになる。この年齢に共通の会話が増えることは、子育てプログラムを本学学生のサポートにより、母親からも少し離れて挑戦していく楽しみを子どもがを見つけ、それを親は見守り、帰宅すれば、体験したことを母と子で語り合うそうである。母親も子どもの語ってくれることを認めほめる。教えてもらった手遊びなどを一緒にやってみる。なかなか良い母と子の関係をつくり出していると考える。

〔問5〕活動を通して、お子様が変わったと思う点がありますか。については、図9-①の通りである。97%の子どもが、受講以前とは異なり、図9-②にあるとおり、「活発に

なった」と、母親は感じている。次に「親と離れて友達と遊べるようになった」となっているが、これも積極的に活動し始めたといえるであろう。この時期、母親と一緒に離れられなくなる母子関係でなく、母親が笑顔で見守ってくれていれば、少しずつ何かに挑戦していきたい年齢である。この子どもの発育・発達を促せる役割もこのプログラムは、担っている。

〔問6〕活動を通して、ご自身変わったこと、

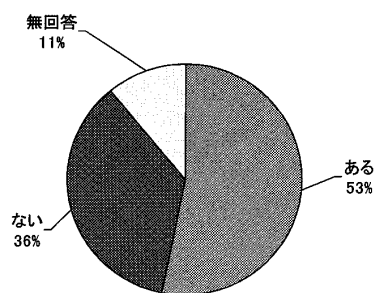


図10-① 活動を通して、ご自身が変わったと思う点がありますか

地域に根づく生涯スポーツプログラム

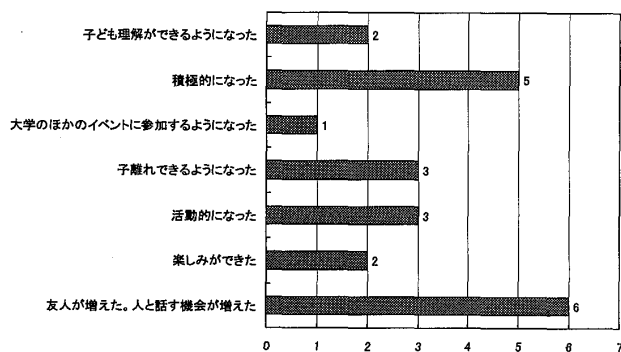


図10-② どのような点ですか（複数回答）

思うことはありますか。については、図一10-①・②の通りである。「ある」と答えた人が、53%で半数を占めている。理由には、(1)友人が増えた。人と話す機会が増えた。(2)積極的になった。(3)活動的になった。子離れができるようになった。(4)子どもが理解できるようになった。楽しみができた。(5)大学の他のイベントに参加するようになった。があり、「親離れ・子離れ」子どもの自立を促しながら、親も何か楽しみを見つけ、このプログラムが子育て支援ともなる。また、地域とのコミュニケーションを図るうえで良好なポイントとなる。

〔問7〕印象に残っているプログラムは、何ですか。については、図一11の通りである。

アスレチック・トランポリン・マット運動は、サーキット遊びの中の種目である。これらもサーキット遊びとみると、一番はサーキット遊びとなる。平均台・積み木・滑り台・

マット・トランポボックス・フープ・トンネル等を体育館にアスレチック場のように組み立てると、子ども達は汗をかきながら挑戦してくれる。運動としては、歩く・走る・跳ぶ・越える・はう・転がる・ぶらさがる・渡る・投げる・転がす等を可能にさせるので、子ども達にとっても楽しみであり、その子一人一人の発育・発達に応じて遊具の使い方は異なるが、年齢に応じて子ども自身が工夫して、遊具に挑戦してくれる。

運動会形式にしたものは、少し競争遊びは入るが、結果はどうであれ一生懸命に挑んでくれる。手遊びは、クールダウンの時に皆で行うが、これは帰宅してからも母と子で、また、一緒にやっているようである。

バルーンを使った遊びも、子どもは好んでくれる。ふくらましたり、中へ入ったり、ボールを転がして入れたり、曲に合わせて振ったりと、家ではできない遊びである。

プログラムの中では、サーキット遊びにはいろいろな運動要素が入っており、年齢に応じて挑戦できるので、この年齢の子ども達の発育・発達を考えると、お勧めのメニューである。

〔問8〕この活動についてのご意見をお願いします。については、意見をまとめていくと、

- (1) 来年も続けてほしい
- (2) 学生さんと触れ合う機会はないので、とてもよい機会だと思います。

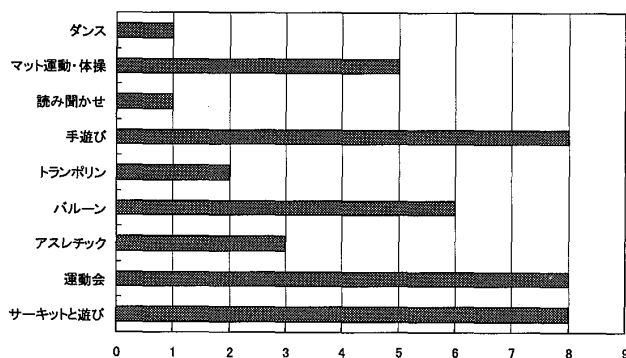


図11 印象に残っているプログラムは何ですか（複数回答）

- (3) 家ではできないことができるので、とても良い経験になっています。
- (4) 子どもに無理をさせない内容なので、とても良い。
- (5) 母子ともに非常にプラスになっていると思う。
- (6) 毎回参加したいので、募集人数を増やしてほしい。
- (7) 料金を上げて頂いてもいいので、抽選ではなく、必ず参加できるようにしてほしい。
- (8) 長期に通えるようにしてもらえると、助かります。月謝制にしても良いかもしれない。
- (9) 親子ともに多くの人と出会えて刺激になる。
- (10) 少人数グループの活動などを取り入れてもらえると嬉しい。
- (11) 手遊び歌のプリントを貰えると家でも遊びやすい。
- (12) 大変有り難い場を作っていただき、感謝しています。
- (13) 学生がもっと積極的に関わってほしい。
- (14) 学生の意識を高めてほしい。(服装など)
- (15) もっと子どもの印象に残るプログラムあればいいと思います。
- (16) もう少し、メリハリがほしい。もっといろんな事をやってほしい。
- (17) 親子で楽しめる遊びをいろいろやってほしい。

いろいろと、希望・意見を書いていただきましたが、(13)・(14)の学生の態度については、今後注意して学生の指導に当たりたい。(15)・(16)に関しては、具体的にどの様な事をしてほしかったのかが述べられていないので、対処できない。現在は、運動遊びを中心にしたプログラムなので、課題としていく。

(17)については、そろそろ幼稚園入園前の子どもさんなので、親子で楽しみ、一緒に遊んでおられる母子もいらっしゃるが、もっと母と子が組んで遊ぶことを望んでいるのかと考

えられますが、徐々に子どもが親からは離れ自主的に他の子ども・同年齢の子どもと遊べる機会をつくりたいと考えている。「親離れ・子離れ」のねらいもある。このへんの兼ね合いも検討課題である。

IV 考察まとめ

二つのプログラムについて考察してみたが、「ワクワクスポーツ」の高齢者プログラムでは、受講者自身の変化、「生活に張り合いが出てきた」、「運動後の気分の爽やかさ」等、生活面や心理面に大きく影響を及ぼしており、これが健康につながっていくことは確かである。こうした、気持ちを継続していくためには、まず、本学の講座の継続が必要である。しかし、過去に他のスポーツプログラムに参加していたが続いていない人が多く、プログラム提供だけでは、なかなか継続にはつながらない。

「生涯スポーツ」は、若い時だけでなく、生涯にわたって実施するスポーツ活動を意味する。スポーツの意味を幅広く競技スポーツ・レクリエーション的なスポーツ・ニュースポーツ等年齢に応じて、身体運動の形は変わっていく。

「楽しさ」、「面白さ」につながる身体運動を生活の中に根付かせることが、「生涯スポーツ」と、呼ぶことができよう。プログラムもこちらからの意図的な介入も必要であるが、受講者自身も家庭において、プログラムが組める習慣を身に付ければと考える。

「親と子の運動遊び」については、永く続いているプログラムがある。

子どもの発育・発達を意識して、意図的に運動遊び等を組んでいる。この講座も地域の需要があり、子育て支援に一役かっている。

子ども達も楽しんで遊びに来てくれているので、この年齢より身体を動かすことの楽しさや、面白さを身に付けてほしい。幼少期よ

り「生涯スポーツ」の芽が育つのである。幼少期から高齢期まで、生涯を通してスポーツを楽しむことを理念として実現したいものである。

V おわりに

生涯スポーツの取り組みとして、現在、誰でも体力や年齢・興味・経験・目的に応じて、いつでもどこでも生涯を通してスポーツに親しむことを目指している。リタイヤした人の余暇利用としてもスポーツは、有効なプログラムの一つである。高齢者社会になった現在、高齢者向けの山歩き・水泳・ダンス・ヨガ等のスポーツクラブの実施が、各地域の自治体や自主クラブで立ち上がっている。この活動が継続していけるように、生涯スポーツを推進していく起爆剤の一つとして、総合型クラブづくりを位置づけ、地域の活性化・少子高齢化・青少年の健全育成・医療費の削減・雇用の創出等々の地域社会における、様々な生活課題を解決するための積極的な受け皿としての役割を持たそうというものである。

総合型クラブづくりに展開していくには、地域住民らによる主体的な運営・発意により多様な形態でスポーツに参画し、連帯感を共有する仕掛けが必要であり、それを積極的に支援することが、行政サイドの課題となっていく。

本学としても、当スポーツクラブの支援を行政に働きかけ、協賛で支援していく必要がある。

(以上、曾和)

地域スポーツに取り組んでみて

—今後の課題—

高度経済成長後、余暇時間の活用が話題になり体育・スポーツ関係の先駆者達は余暇時間が出来た代償として身体的活動を伴う労働が減少したと、たとえば、交通機関の発展・

家事労働が機械化した事を例に挙げ多く述べられてきた。その分余暇時間を健康のために、身体活動に使うべきであると言うのが体育人の主張である。

しかし、活動場所・指導者の不足が現実的な問題として突きつけられ問題解決を行う中で、戦後日本の体育・スポーツ教育が学校教育にあまりにも依存していたことが明らかになり、体制の立て直しを含め「はじめに」でも述べた「スポーツ振興法」の制定にも関わっているものである。

そして、この問題の解決策の一つ・政策の一つとして取り上げられたのが「総合型地域スポーツクラブ」である。地域にスポーツ環境を整えるために「地方の実情に即し」の一言から始まった本学の取り組みも年数を重ねる度に問題点も多く出てきた。

まず、施設の問題がある。学生が主体である大学において正課授業・課外活動の活動率の増加により施設の稼働率が急増し、活動場所が確保しにくくなった。スポーツの関連の資格授業（レクリエーション・インストラクター）に学生が殺到し、開講時間数を増やしその分稼働率が上がり施設の空きが減少したのである。

また、指導者問題も地域の「子ども」「老人」を担当していた曾和が本年度をもって退職。献身的に活動を行っていた曾和が退職することでプログラムが停滞するのは曾和に依存し過ぎ、組織としては未熟であったことが浮き彫りになってきた。この現状はまだ一教員に頼り運営されており、地域スポーツの改善の一助として行ったプログラムが何ら日本のスポーツ事情と変わりはない。学校教育に依存していたか、一教員に依存していたかの違いである。

今後、本学の地域スポーツ活動（仮称）の取り組みは、学校内組織である生涯学習センター内（次年度 生涯学習・地域交流センターに名称変更予定）に事務担当者（有給者）を

置き、地域スポーツ活動を支援してくれる人（ボランティア）を岳内外に募集し、大学と地域が交流・連携しながら浮き彫りになった問題をも一つ一つ解決しながら進めていく必要があると認識した。

(以上、但尾)

参考文献

- 1 雑誌 「体育の科学」 スポーツ・マネジメント、日本体育学会編集、2007 .Vol.57、杏林書院

- 2 雑誌 「体育の科学」 生涯スポーツのすすめ、日本体育学会編集、2006 .Vol.56、杏林書院
- 3 生涯スポーツ概論、黒川 國児、浅沼 道成、清水 茂幸、中央法規、2004年5月20 日 発行
- 4 新体力テストー有意義な活用のためにー、文部科学省、ぎょうせい、2006年5月10日6版発行
- 5 地域特性に応じた保健活動、平野 かよこ、ライフ・サイエンス・センター、2004年2月19日初版第1刷発行

資料 1

「ワクワクスポーツ」受講者アンケート

《プログラムについて》

問1 どこでこの活動を知りましたか？

[]

問2 なぜこのプログラムに参加しようと思いましたか？

[]

問3 このプログラムに参加してみてどうですか？

[]

問4 今までしてきた種目についてお聞きします。

①どの種目が楽しかったですか？

[]

②難しい種目はありましたか？

・はい ・いいえ

「はい」と答えられた方は、以下の質問にもお答えください。

・それはどの種目ですか？

[]

問5 プログラムに参加する前と参加してからの様態についてお聞きします。

①思っていた自分の体力と現実に違いがありましたか

・はい ・いいえ

「はい」と答えられた方は、以下の質問にもお答えください。

・どこが違っていましたか？（できれば具体的にお願いします。）

[]

②何か自分の中で変化は感じますか？

・はい ・いいえ

「はい」と答えられた方は、以下の質問にもお答えください。

・どんなところで感じられますか？

[]

問6 他にこのようなプログラムに参加されていますか？

又は、過去に参加されたことがありますか？

・はい ・いいえ

「はい」と答えられた方は、以下の質問にもお答えください。

・それは、どんなプログラムですか？

[]

地域に根付く生涯スポーツプログラム

- ・ 現在も参加されていますか？

- ・ はい
- ・ いいえ

問7 他に一緒に参加されている方とコミュニケーションをはかることができましたか？

- ・ たくさんできた
- ・ まあまあできた
- ・ できた
- ・ あまりできなかった
- ・ できなかった
- ・ しなかった

問8 若い世代の学生と一緒に活動してみて、どうでしたか？

[]

問9 このプログラムに希望すること（例：種目、時間）などあれば、お書きください。

[]

問10 他にご意見があればお書きください。

[]

質問は以上です。

ありがとうございました。

資料 2

「親と子の運動遊び」受講者アンケート

問1 どこでこの活動を知りましたか？

[]

問2 なぜ、この活動に参加しようと思いましたか？

[]

問3 参加してみてどうでしたか？

[]

問4 親子関係に変化はありましたか？

- ・ ある
- ・ ない

「ある」と答えた方は、どのような変化ですか？

[]

問5 活動を通して、お子様が変わったと思う点がありますか？

- ・ ある
- ・ ない

「ある」と答えた方は、どのような点ですか？

[]

問6 この活動を通して、ご自身変わったと思う点がありますか？

- ・ ある
- ・ ない

「ある」と答えた方は、どのような点ですか？

[]

問7 印象に残っているプログラムは何ですか？

[]

問8 この活動についてのご意見をお聞かせください。

[]

質問は以上です。

ありがとうございました。